

自己を超え、よろこびへ

斎藤恵子

私は折にふれ、神谷美恵子の著作を読む。私の生きるということを支えてくれる。再度「いのちのよろこび」を読む。生きていくということの尊さを改めて感じる。

現在、私は毎日父のいる施設に通っている。父は九十七歳。食事を嫌がり少ししか摂らず、あとどれだけ生きられるのか案じている。顔を見せ励ますのが日課である。

その父は私を子どものころから蔑ろにしていた。父は苦学して高等師範学校を出、教職に就き、父の両親や弟妹、そして私達家族の生活を支えた。母は苦労ばかりだったが、母を顧みることにはなかった。父は高学歴の役人や大学教授、銀行員などを尊んでいた。そうなるべく私の兄には大いに期待していた。凡庸な私を気に掛けることはなく。

ある休日、小学校二年の兄が勉強をしている時、私が何か話しかけたのか、兄が「恵ちゃんも勉強の邪魔をする」と父に訴えた。父は何も言わず、私を高く抱き上げ、そのまま縁先に行き、ゆさゆさ揺さぶり、ぶりをつけ私を庭の固い土に投げつけた。あまりの咄嗟のことに声を上げることもできなかった。小菊の切り株が私の太ももを刺し出血したが知らん顔の父だった。母は黙って赤チンを塗った、母は父に何も言えない。母は既に両親を喪い帰るところがなかったから。

父は私の他のきょうだいには将来を期待したが、私には「どこか売店にでも」と言った。私は自己肯定感が持てず俯いていた。私はいはいけないと思っていた。父も私を恥ずかしく思い、私の存在を隠していたようだ。ある日來客が私を目に留め「もう一人お嬢さんがおられるのですか」と驚いた様子だったのを憶えている。

『「存在」の重みーわが思索 わが風土』の章には「幼少期には主として暗い印象が残っている」「また、これは説明しにくいことだが、幼いころの私の周囲では人と人との間が必ずしもなめらかとは言いがたいようだった。」と記していることに、神谷美恵子さんでさえ、このように感じながら生きておられたのだと慕わしいものを感じた。

世間的に見れば著者は才知に恵まれ極めて幸せと思われるのだが、その暗さ重さが後に医師となり愛生園での仕事につながっていったことと思う。自己を「少しでもよりよく知ることとは他人を、人間をよりよく知ることの一步だと信じる。」という内省的な思索から、人間存在全体への愛、感謝の気持ちが生まれたのだ。

私の母は数年前に亡くなったのだが、意識のないまま十数年寝たきりだった。父は母に対して「悪かった」と呟き、毎日見舞いを続けた。私はそうした父を見、また老いていく姿に、このままの私ではいけないと思った。感謝の気持ち私が私には薄く恨み言ばかりが渦巻いていた。

「われわれ人間にとつて、人生のかなりの部分が、自らの心の姿勢を変えることによって、変化させ向上させることができる」ということは、私どもに生きてゆく勇気を与えてくれます。（「生きがい」を求めて）このことばを真理と思った。まずは自分の心のありようを見つめ直すことから始めなければならぬ。

私は手遅れにならないよう、ほかのきょうだいと共に三年前には父と親子で中国へ二泊三日の旅をし、また父に話を聞き九十余年の自分史をまとめた。父は喜びはしたが、自分史を作成している時でも「ワシが気に入らなければ途中で止める」と言ったり、私の仕事での受賞を「運がいいだけ」と言ったり、時々心が折れそうになった。その時もこの著作が私を支えた。

「生きがいについて」の章で愛生園である青年のことが書かれていた。知的障害者でもあり口もきけないが、笑顔で老患者に尿瓶をあてがいがい、にこにこ挨拶もしてくる。「やはり私はこの愛生園で働かせてもらおうという意欲が湧いてくるのは、そんな時なのです。人間というものは、存在そのものとして尊い」、そしてどんな姿勢で生きていくかが大切な意味を持っていると。

人はどんな場合も存在として尊いということを私は繰り返して心に刻む。社会に有用であるうがなかるうが、生きていくことが尊いことなのだ。「人によっては生きていくこと自体が苦しみなのです。」「私ども健康な人間が、長島へ行って、ひげ目を感じることがあります。」「自分があんな目に合ったら、果たしてあんなに生きることが出来るかという、痛切な反省が湧いてくるからです。」「肉声の響きが聴こえる。常に自己を見つめていた。」

数年前から父は度々私に「有難う」と感謝のことばを言う。よく老いて死が近づくと善人になるというが、善人にならなくても生きていて欲しい。「今日の日付も分からなくなり、情ないことです」と枕元のメモに書いていた。老いて人の世話になり生きていくのは辛いこと。私自身が省み、父の心を思いやらねばならない。

自己を見つめることを忘れまい。それが人を理解し、いのちのよろこびに繋がるのだと思う。